第4回 作文コンクール

心のふれあい大賞

入賞作品集

主催　公益社団法人 福岡県医師会　　共催　福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

後援　九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会
北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社（順不同）

目　次

表彰式……2
主催者あいさつ……3
入賞作品紹介
一般の部　最優秀賞……岡田紀子　さん　4
一般の部　優　秀　賞……岩佐奈津実さん　6
一般の部　優　秀　賞……立花悦子　さん　8
中高生の部　最優秀賞……井上紗歩　さん　10
中高生の部　優　秀　賞……松尾康生　さん　12
中高生の部　優　秀　賞……野中愛仁　さん　14
小学生の部　最優秀賞……田中花　さん　16
小学生の部　優　秀　賞……兼屋瞳子　さん　17
小学生の部　優　秀　賞……廣田琉花　さん　18
表彰式の様子……19
選考委員……20
募集要項……21

表彰式

（平成30年１月20日（土）　福岡市・イムズホール）

二列目

●中高生の部 優秀賞
野中　愛仁 さん

●中高生の部 優秀賞
松尾　康生 さん

●中高生の部 最優秀賞
井上　紗歩 さん

●一般の部 最優秀賞
岡田　紀子 さん

●一般の部 優秀賞
岩佐　奈津実 さん

●一般の部 優秀賞
立花　悦子 さん

一列目

●小学生の部 優秀賞
兼屋　瞳子 さん

●小学生の部 最優秀賞
田中　花 さん

●福岡県医師会会長
松田　峻一良

●西日本新聞社社会部部長
宮崎　昌治

●小学生の部 優秀賞
廣田　琉花 さん

主催者あいさつ

公益社団法人 福岡県医師会
会長 **松田　峻一良**

福岡県医師会作文コンクール「心のふれあい大賞―わたしのまわりの医療体験」は、医療従事者と患者、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて、病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集するもので、今回で四回目を迎えました。

医療に対する思いを表現し、伝えていただくことが、県民の方々と医療従事者との絆をより深め、福岡県の医療をよりよいものにしていく一歩になると考えております。

今年度は、一四〇点以上ものご応募をいただき、選考の結果、一般の部・中高生の部・小学生の部から最優秀賞、優秀賞の合計九名の方々を、表彰させていただきました。受賞者の皆様に心よりお祝い申し上げますとともに、本コンクールにご応募いただきました方々、またご支援賜りました関係者の方々にも厚くお礼申し上げます。

本冊子では、受賞者の方の作品を紹介させていただきますので、ご高覧いただけますと幸いです。

一般の部

最優秀賞

筑紫野市
岡田 紀子

「決意が出来た言葉の贈り物」

とにかく、手術の多い人生である。

生まれつき両足先天性股関節症を患う私は、満一歳で左足の手術。長いリハビリの末、歩けるようになったのは満三歳である。

その後、跛行はあるものの、健常者と一緒に体育や軽めの部活、スポーツを楽しんで、青春時代や社会人生活を謳歌し、結婚することも出来た。

転機は三十五歳、二人の子供の育児に夢中で日々の生活の中、足のオーバーワークに気付いた時は、既に変形性股関節症進行期になっていた。

痛くなって初めて反省するも既に遅く、足は悪化の一途を辿って行った。

こうなると、真剣に向き合うしかない。大学病院に通い、先生には、この若さで人工股関節だけは避けたいと懇願する。水泳も慌てて始める。体重を落とす努力も怠らない。

しかし、努力も虚しく、左足末期の為手術を勧められ、激しく落ち込む私に、先生が話してくれたその言葉は、「まだ若い年齢で足を人工にする事は確かに辛いですが痛みから解放されて、生活の質を向上させることは、決してマイナスではなく、これからの人生においてむしろプラスになる事の方が多いのだと思うよ。」

その言葉はどん底に沈み込んでいた私のネガティブな心の池を、まるで輝く澄んだ水がゆっくりと流れるように私の中に広がり、やがてこの足を治して、跛行をせずに杖なしで自由に歩きたい。今迄の歩けない自分を取り返したいという、強く前向きな希望に変わっていった。

左足の人工股関節置換術を受けた二年後、右足も悪化のために、同じ手術を受けた。

この手術は一般的に、珍しいものでは無いが、体の一部が血液の通らない人工物になってしまう悲しみは本人にしか分からない。

しかし、私の主治医の先生が、失う事より、その先に得る事の希望を教えてくれた。患者はその一言に救われ、

積極的に治療を受ける勇気を持てるのだと思う。

医師と患者の信頼関係がより良い医療効果に結び付くと、私は信じる。

今、順調な私の足は、日々の消耗により、やがて再置換の手術を受ける時期を迎えるかもしれない。

しかし、私はその時、担当の医師を信じ、冷静に最良の治療方針を受け止めていこう。

自身の生活の質を上げ、その年齢なりの健康に繋げるため、迷わず一番良い選択をしたいと思う。

今日も、私は感謝の気持ちと共に、自分の足で元気に歩いている。

一般の部

優秀賞

飯塚市
岩佐 奈津実

「患者になって」

「おはようございます。お変わりありませんか。」と、朝、担当の看護師さんが病室に来られる。

「こんにちは。今日、夜勤の○○です。お変わりありませんか。よろしくお願いします。」と夜勤の看護師さんが病室に来られる。

私は、これまでお産以外に入院を経験したことのないくらい体力にも健康にも自信がありました。しかし、丁度一年前、皮膚の痛みから病院を受診し、ヘルペスと診断され、悪化傾向の為、二週間の入院を余儀無くされてしまいました。これは、そんな時、初めて患者となって体験したことです。入院してから終日点滴治療は受けていたものの、ベッドから動けない訳でも無く、トイレにも自分で行ける様な状態でした。しかし、冒頭の二つの何気ない言葉がどれだけ心に染み、患者として安心感、安らぎを感じたことか……。

現在、私は、デイケアセンターで介護職として勤務しておりますが、この入院を機に色々な事を考え、また、反省し、発見する事が出来ました。中でも、患者様の気持ちが少し理解出来た事は大きな経験でした。入院によりある日突然、日常とは違う環境に身を置く事になると、なんとなく不安と言うか、落ち着かないと言うか、心細いと言うか、とにかく病気の治療に加え、心のダメージが大きいのです。だからこそ、職員の何気ない言葉や態度が良かれ、悪かれ、患者に影響するのです。職員が何も言葉を発せず、病室の入り口で部屋を見回して帰る。廊下ですれ違っても知らない顔で通り過ぎる。これは、よくある光景です。この行動は、患者にとって、威圧的に感じ、不安にかられ、何か落ち着かない気持ちにさせてしまいます。逆に、元気に笑顔で挨拶を交わす。廊下ですれ違って、会釈をされ、ほほえまれると、特に理由はないが、不思議と安心し気持ちが明るく軽くなります。

この経験は、退院後の私の気持ちに自然と変化をもたらし、私は、勤務するデイケアセンターで意識して元気に

笑顔で挨拶することに取り組む様になりました。ある日、気づかずに通り過ぎてしまった利用者の方から「知らん顔したね」と言われました。私は、知らない顔をしたつもりはありませんでしたが、利用者様にとっては一対一であり、気づかなかったでは解決しません。すぐに「ごめんなさい、おはようございます。」と元気に笑顔で挨拶しました。「おはよう！」と笑顔で挨拶を返して下さいました。とても嬉しく心が晴れました。広い範囲に目を向けることも大切な事を気づかされました。それ以来、私は、意識することなく元気に挨拶が出来る様になりました。院内のすれ違う方々とも元気に挨拶が出来る様になりました。私自身が、とても爽快な気持ちになれます。

私が勤務する院内には、医療理念が掲げてあります。『患者中心の医療』『医療の質の向上』『地域社会にあった手づくりの医療』『安心と信頼を持たれる病院づくり』これらは、朝礼で唱和した事もあり、頭の中には入っていますが、難しい課題だなと、入院を経験し痛感しました。医療理念の実現は、まず、患者様の気持ちに寄り添い、理解し、何よりもまず自分から元気に挨拶することで開けて行くのではないかと……。まず、実現出来る事から取り組んでみよう。これは、挨拶だと……。

私は今、自然に生まれる元気な挨拶で、素敵な朝を迎え、素敵な一日を送っています。

一般の部

優秀賞

北九州市
立花 悦子

「本当の対話とは」

三年前の夏、私はある医師に出会っていなければ今頃この世にはいなかったと思います。

当時私は長年確執のあった母の先の見えない同居介護と小学生の子育ての両立。夫は長期出張で外出ばかりの生活を送っていました。

ゆっくり話を聞いてくれる人もおらず、ストレスだらけの日々。痛みを伴うお腹の異常が数ヶ月以上続き、胃痛もあり満足に食事をする事も出来ず体力も落ち五キロ程痩せてしまいました。かかりつけ医で胃カメラを行い、小さな潰瘍が三つ見つかりました。しかし腸の痛みは治まらず、過敏性腸症候群の疑いもあるので別の医院で大腸カメラを勧められました。

紹介された医院では激痛でカメラが途中までしかうまく入らず、開腹手術の経験はないのにも関わらず「腸の癒着があるはず」と言われ子宮筋腫と診断されました。婦人科で詳しく診てもらいましたが勿論異常はありません。

一向に体調は回復せず痩せるばかりで大きな病院の消化器内科を紹介されました。結果的に私はこの消化器の先生に命を救われました。

まずその先生はパソコン入力の合間に必ず患者の目をきちんと見て話をして下さいます。

こちらから質問をしなくてもこれまでの経過をじっくり聞いて下さり、「もう二度とカメラはやりたくないよね。小柄で痩せ型の女性はそういう事もありますよ」と辛さを分かって頂きました。同じ検査ではなく小腸バリウムを勧めて下さいました。念の為クローン病や潰瘍性大腸炎があるかもしれないからだそうです。私は大きな病院は待ち時間ばかり長くて診察は数分という偏見を持ってしまっていたので、こんなにしっかり向き合ってくれる医師もいるのだと意外でした。検査日も私が不安にならないよう先生の担当日を指定してくれ、腹痛で朝方から眠れない為検査までの数日間、鎮痛剤を処方して頂きました。検査当日、私は微熱と手足に湿疹が出来てしまい、薬疹ではないかと思いましたが先生に尋ねると「少し気になるので皮膚科で診てもらってからにしましょう」と自ら皮膚

科へ行って診察の手配をして頂き、急遽血液検査と尿検査を行った結果血小板が異常な値である事がわかり（七千）、緊急入院となりました。

血液内科へ移り骨髄採取される事になり、こういう事態になるのはどれ程大変な病気なのか素人でも何となく分かります。結果待ちの間、私は「あれだけストレスを抱え介護している母より結局先に死ぬのかも」と絶望的な事まで考えてしまっていました。その間も消化器の先生はこれから先の治療内容や入院への不安を解消してくれるような前向きな言葉をおっしゃって下さいました。

結果ストレス過多で免疫力が低下し何らかのウイルスに感染。急性型特発性血小板減少性紫斑病と診断されました。ステロイド内服、経過次第で輸血の可能性もあることを知らされました。何事も実際に直面してみないと知らないことばかりです。血液内科は、日々命と向き合う医師や看護師、患者さんが多数おられる大変な現場だと入院して初めて知りました。また献血がなぜ必要なのか、大切なのかも知りました。血液には寿命があるなど条件がたくさん存在します。少子高齢化に伴い、近い将来大変になるのではと思います。もっと健康な若い世代に献血の大切さを具体的にアピールして頂きたいです。

私は診察、入院時期が丁度お盆のさなかで、どこの医院も休診で本当に幸いでした。急性期病院で救急対応など大変多忙だったと思われますが、先生は他科にも関わらず一週間の入院中に三度も経過を見に来て私の話を聞いて下さいました。退院前日には夜八時過ぎに来られ、退院後の薬の減薬の副作用や本来の腸の検査予定について、現在の体の状態など詳しく説明して下さいました。何より真剣に話を聞いてくれるのです。そのことで気持ちが楽になったのか私の腹痛、腸の不快感は入院中に治ってしまいました。その後一度もお腹の不調はありません。何ヶ月も痛みで苦しみ病院を幾つも回っても完治しなかったのに私自身驚きました。

医師と患者の間には目に見えない壁があると少なくとも私は思います。〝先生〟と言う響きが患者さんを遠慮させ気を使ってしまうような気がします。医師が患者の心を理解しようという気持ちが真摯に伝われば患者は、「この先生なら」と素直に本音や弱みを話せると思うのです。そこから本当の対話が生まれます。高度な技術は勿論ですが、患者とのコミュニケーションは信頼関係。事前に学ぶものではなく、自然に生まれてくるものだと思います。薬でなくてもコミュニケーション、信頼関係で病気をも治すことがあるのだと心から感じました。本当に命も心も救われました。今となっては貴重な経験だったと思い返すことが出来ます。消化器科の先生には本当に感謝しています。ありがとうございました。

中高生の部

最優秀賞

福岡市・高校１年
井上 紗歩

「最愛の祖父を送って知らなかった医療のあり方」

昨年の夏、私は最愛の祖父をホスピスで見送った。二月、脳や全身に転移が見つかり、医師から「脳に転移した癌は大きく、急死する可能性、記憶を徐々に失う可能性がある。余命は半年。」と告げられた。祖父は涙いっぱいの目で私達のことをじっと見つめ、「みんなの事を最後まで忘れたくない。最後までしっかり記憶を持って、自分らしく生きていたい。」と言い、脳に出来た大きな癌だけを取り除く、開頭手術を望んだ。祖母や母達は、手術をするかどうか何度も話し合った。医師達は祖父や家族に多様な治療方針の説明を詳しく行い、その選択を求めた。担当医の先生は気休めの言葉や無責任な言葉は一切発さず、また手術にも積極的ではなかったが、出来る限りの医療の力を使って、祖父の最後の意志を必死に通そうとしてくれた。

祖父は手術することを選択した。その頃から、自宅で突然泣き出す母の姿を見るようになった。私は子供だから、大人の世界で繰り広げられている厳しい現実を唇をかみしめ、見つめることしかできなかった。その時に初めて、治療することの出来ない医療もあるのだということを知った。良くなるためでなく少しでも豊かな時間を過ごすために施す医療もあり、そこに命懸けで挑もうとする患者や家族、医師たちがいる。私はそんな大人達の姿を見て、自分には何が出来るのかを考えた。

祖父は私のピアノが大好きだった。大会に出るといつも同行し、決まって最前列の真ん中の席に座り、私のことを暖かい優しい目で見守り続けてくれた。私は決めた。

「おじいちゃんに演奏会をプレゼントしよう。それを一つの目標にしてもらおう。」それが私に出来る唯一のことだと思った。

四月になり開頭手術を乗り越えた祖父は、後頭部に二十センチくらいの大きな傷を作り退院した。私は高校受験を控えていたが、夏休みに祖父に大きな曲をプレゼントする為、毎日何時間も心を込めた音作りに励んだ。術後、祖父の薄れかけていた記憶ははっきり

と取り戻せたものの、その体力は徐々に衰えていった。しかし私や母の前では、その弱っていく姿を見せず、

「元気だよ。もう走れるんだよ。」と懸命に声を張り上げ、優しい嘘をついてくれた。

七月に入り、祖父は呼吸が苦しくなりホスピスに入った。母は私の練習が終わった後、夜中に高速で祖父のもとへ走る日が増えた。

そして迎えた本番七月二十九日の朝、祖父の容態は急変した。祖父の元へ行くと、祖父は残念そうな目で頭を撫でていた。ホスピスの看護師長さんが、

「もう少し容態が安定したら、ホスピスのホールまでベッドと酸素ボンベを移動するのでそこで演奏してみませんか？」と声を掛けてくれた。それを聞いた祖父は、嬉しそうに微笑んだ。夕方になると少し容態が安定した。看護師さん達は急いでベッドと酸素ボンベをピアノがあるホールに運んだ。ホールには、ホスピスにいる他の患者さんご家族と医療関係の方など、五十名程が集まった。私は、祖父に曲をプレゼント出来る嬉しさと、これが最後のプレゼントになるかもという悲しさと寂しさと、言葉に出来ないいろんな感情が胸の中に湧き出た。しかし願いは一つ。

「おじいちゃんが少しでも幸せな時を過ごせますように。」その想いを強く持ち、精一杯の音で奏でた。演奏が終わると、祖父はすごい笑顔で上体を起こそうとしたので、看護師さん達が驚き急いで支えこんでくれた。祖父はずっと満面の笑顔のまま、

「さほちゃん、ありがとう。ありがとう。」と言いながら何度も手を叩いてくれた。その翌日、祖父はまた急変し、集まっている皆に声かけ、

「みんなもっと幸せになれよ。」と言って、嘘のように息を引き取って逝った。最後の力を振り絞り、最期の最後まで、私達に精一杯の愛情をかけてくれた祖父。私はそんな祖父の孫に生まれてきて本当に幸せだ。

祖父と別れて、一年が経った。祖父を通じて出会った医療の現場では、治療出来ない医療、患者の気持ちを尊厳する医療、心をケアする医療がある事を知った。また祖父のように患者は医療を施される身であるだけでなく、反対に家族を想い、病と向き合いながらも家族をケアすることも出来るのだということを知った。

祖父の存在は、私にとってやはり大きい。姿はなくなっても、ずっと胸を暖かくしてくれる。私もいつか、そんなおばあちゃんになりたい。例え、どんな状況になっても、人を想い、想われる人に。そう生きていく事がこれからの私の目標だ。

中高生の部
優秀賞

飯塚市・中学１年
松尾 康生

「先生がくれた安心感」

僕にはぜんそくの持病があります。小さい時から今まで、ずーっとこの病気になっています。この病気のせいで入院したこともあります。あんまり覚えていないけど、点滴をするためにぐるぐる巻きにされたり、一日中付きそいでお世話をした後、直接職場に向かって仕事をしたりしたので、すごく大変だったと両親が言っていました。ぜんそくの発作のせいで体育の授業を見学したり、マラソン大会などの学校行事に参加できなかったりして、「さみしいなぁ」と思うことが時々ありました。

中学生になった今でも、この病気を診てもらうためにかかりつけの先生の所に通っています。先生の病院はたくさんの子供たちがいます。その中でも僕は大きいほうなので少し恥ずかしい気がします。

先生は、たくさんの子供たちを慎重に手早く診察していくので無口です。病気に関する必要なことしかしゃべりません。笑っているところもあまり見たことがありません。「あの先生、あんまりあいそよくないねー。」と言っているのを聞いたこともあります。

たしかに、初めて診察を受けた人はそう思うかもしれません。僕も最初のころは先生が少し苦手でした。でも、長くかかっているうちに、そうじゃないんじゃないかと思えてきました。確かに僕の症状がひどくて苦しい時は、真剣な表情（目つきが鋭くなってちょっと怖い）で聴診器の音を聞いたり、電子カルテで昔の記録を見たりして治療方法や薬を決めてくれます。逆に、ぜんそくの発作がひどくないときや、治療しておさまってきたときなどは、聴診器をあてながら「よしよし。」という表情でうなずいてくれます。そして症状が治まって、治療がいったん終了というときには世間話をしてくれることもあります。そんな先生を見て「僕の病気を真剣に治してくれようとしている。」と思うので、先生の診察を受けると何となく安心します。

また、小さいころに予防接種を受けた別の先生は、注射が嫌いだった僕の「先生、痛くしないでください。」とい

う無茶なお願いに対して「ははは、分かった、分かった。痛くしないから大丈夫だよ！」と笑顔で答えて注射をしてくれました。そして、「ほら、終わったよ。」と教えてくれました。注射を打たれたことも、終わったことも分からないくらい、全然痛くありませんでした。なんで痛くなかったのか不思議だけど、今でもはっきり覚えています。

無口であいそがない先生と笑顔で優しい先生。全く正反対の性格に見える二人の先生だけど、病気のつらさや注射の痛さで不安になっている僕の心を安心させてくれるところは同じだと思いました。

これから、医療の技術がどんどん進歩してぜんそくの発作で苦しむことも、注射で痛いと感じることも無くなるかもしれません。でも、不安な気持ちで病院に通ってくる人はいると思います。大変だと思うけど、先生や看護師さんにはいつまでも「患者さんの病気を治して元気にしたい」という思いを持っていてほしいです。その思いがあふれて表に出てきた表情や言葉で安心させてもらった僕からのお願いです。

僕の将来の夢はまだ決まっていませんが、二人の先生みたいに不安な人を安心させることのできる大人になりたいと思います。

中高生の部
優秀賞

福岡市・中学１年
野中 愛仁

「おじいちゃん幸せだったよね」

僕が小学校三年生の時の体験談。僕のおじいちゃんは、病院が大嫌いだった。病気もまったくせず、病院に行くといえば歯医者ぐらいだ。ある時、おじいちゃんが最近腰が痛いと言いだした。その一カ月後には、頭と首がものすごく痛いと言っていた。いつもの事だろうと思ったので、僕は全く気にしていなかった。そしたらおじいちゃんは、大きな病院に入院する事になってしまった。「なぜ、いきなり入院なんかなってしまったんだろう。」ってぐらいで、あまり深くは考えていなかった。

おじいちゃんが入院して何日かたって、母に尋ねた。「おじいちゃんは、いつかえってくるの。はやく一緒に遊びたい。」母はこう答えた。「おじいちゃんは、小細胞肺がんだったから、帰ってくるまで少し時間がかかるね。」

そう言われた時僕の胸はズキッとした。それから僕は、お兄ちゃんと学校から帰ってきてかかさず毎日お見まいに行った。僕が行く時間帯は、だいたい看護師さんと楽しそうに会話していた。「痛い、痛い」と言っているけど楽しく会話しているので、僕は不思議だなと思った。入院して一週間後から抗がん剤治りょうが始まった。抗がん剤はイノテリカンとシスプラチンという薬で点滴で投与する。無事に三日間終わったと思ったが四日目の朝高熱をだしてしまい、おじいちゃんは酸素マスクをつけていた。担当の先生に呼ばれて言われたことは「今日が危ない」と言われたようだ。抗がん剤の副作用で間質性肺炎をおこしてしまったようだ。僕はおじいちゃんが今日死んでしまうなんてそんなふうには見えなかった。絶対大丈夫でありますようにと祈りながら側で見守った。次の日きつそうだったけど話もしてくれた。大丈夫だったんだとホッとした。肺炎をおこしてしまったことにより抗がん剤治りょうはできなくなり治りょう方法が緩和ケアにかわった。あの日からどんどんやせて、会話するのも少しつらそうな姿は、僕にでもすぐにわかった。

入院して、一カ月半がたった頃に在宅医りょうに切り替わった。でもおじ

いちゃんは家に帰ってこれたことがすごくうれしかったようだ。家に介護用ベッドなどが置かれていて二日に一度は、先生と訪問看護師さんが来てくれていた。「体調はどうですか、きになる事や痛いところはありませんか？」と優しく訪ねてくれていた。おじいちゃんは、病院にいた頃はごはんをがんばって食べていたが、家に帰ってきてからは、全くといっていいほど食べることができなくなっていた。そしてまた、かなりやせた。飲み物をのむのも、お薬をのむのもつらそうだ。だけど僕やお兄ちゃんの顔を見たらうれしそうにニコッと笑ってくれる。今までみたいに、プロレスしたりたくさんおもしろい話をしてくれたり、おいしい料理を作ってくれたり、いっぱいいっぱいいろんな所に連れていってくれたり、できなくなったけど、それでも、僕はおじいちゃんが大好きだ。笑ってくれる顔を見るだけでもいいんだ。けれど、おじいちゃんは、退院して二週間ぐらいたった時から急変した。ほとんど眠っている状態であまり目もあけない。だけど声はきこえていると思った。「いってきます」「ただいま」「遊びにいってくるね。」そんなささいなことだけど毎日声をかけていた。僕の誕生日の日の事だ。おじいちゃんが高熱をだしたので本当に危ないと言われていた。たくさんの汗をかいていてほんとにつらそうだった。おじいちゃんの家でごはんを食べた。朝方お母さんにおじいちゃんが亡くなったと聞かされた。僕は信じられなかった。だけどなにも話さない、でもまだ温かい。まったくこの状況をうけいれることができなかった。お通夜が終わり、おそう式の日がきた。はじめて「おじいちゃんが死んじゃったんだ。」と思った。ほんとに今日でいなくなるんだと思うと涙がとまらなかった。今までこんなに泣いた事がないぐらい泣きまくった。

「おじいちゃん、今までありがとう」と思い出せば思い出すほど涙があふれでてきてとまらなかった。

その時の事を思い返すと亡くなる日まで一緒におじいちゃんと家で過ごせたこと入院先の先生、看護師、訪問診りょうの先生、看護師さんの優しさを感じれた事介護の大変さを身近で経験することができた事、僕はとても貴重な体験をしたんだと思う。おじいちゃんは長生きすることはできなかったけど医りょうが進歩しているからこそ在宅医りょうができたんだなと思う。おじいちゃんはたくさんの人に愛されて家族みんなに看取られて天国にいけたんだと思うと最期はとても幸せだっただろうなと僕は思う。

小学生の部

最優秀賞

筑後市・小学６年
田中　花

「たくさんの努力と優しさに」

私には五歳の弟がいます。

弟は予定より三ヶ月早く、一〇六一グラムの極低出生体重児で生まれました。弟が生まれた瞬間からＮＩＣＵ（新生児集中治療室）のお医者さんや看護師さん達が弟を助けるために沢山の治療やお世話をしてくれました。その時のことを書きたいと思います。

通常赤ちゃんは、お母さんのお腹の中で約四十週間かけて、お腹の外に出ても自分で生きていくことが出来る状態で生まれてくるそうです。しかし、弟のように早く生まれると肺の機能が未熟な状態で生まれるため、自分で呼吸をすることができないそうです。弟も生まれてすぐに呼吸が苦しくなったので、手術室の中で待機していたＮＩＣＵの先生が気管に管を入れて人工呼吸器につないでくれたそうです。

肺だけでなく皮ふも未熟な状態のため、体温の調節が出来ず、保育器の中に移されて手術室からすぐにＮＩＣＵに運ばれたそうです。

弟がいたＮＩＣＵは、早く小さく生まれた子が入院しているので、かぜや色々なばい菌が入らないように中に入ることができるのは赤ちゃんの親と祖父母だけでした。だけど、弟が生まれて一ヶ月くらいのときに「きょうだい面会」というものをさせてもらいました。看護師さんに手洗いの仕方を習い、熱を計って先生の診察を受けて病気ではないことを確認してＮＩＣＵに入ることが出来ました。それまではお母さんが毎日見せてくれる写真でしか見た事がなかったので、ドキドキしながら弟の所へ行きました。

「うわぁ。小さい。」

初めて会ったとき、そうつぶやきました。弟は思っていたよりもすごく小さくて驚きました。まだ沢山の点滴の管がつながっていたので抱っこは出来なかったけれど、触ることは出来たので保育器に手を入れて初めて弟に触れました。小さな弟の手足は私の指と同じ位の太さでした。こんなに小さいのに一生懸命生きようと頑張っている弟を見て、お医者さん達が沢山の治りょうをしてくれている事もすごく伝わってきました。また、看護師さん達も二十四時間ずっと弟のお世話をしてくれていることが分かりました。

弟が生まれた瞬間から、お医者さんや看護師さん、他にも沢山の人に助けられ、そして支えられ、かわいがってもらったお陰で、今では後遺症もなく元気に過ごしています。

今年、弟は五歳になりました。今でも定期の診察に行っています。この診察は年に一、二回しかないので、先生に会う機会は少ないです。先生は弟に会うたびに「大きくなったね」とうれしそうに言ってくれます。そんな成長していく弟を見せられるのは、本当に先生や看護師さん達のお陰だと思っています。

先生達のお陰で毎年みんなで弟の誕生日を過ごせることに本当に心から感謝しています。

小学生の部
優秀賞

古賀市・小学４年
兼屋 瞳子

「初めての手じゅつと入院」

夏休みに、わたしは八日間、のどのしゅじゅつをするために入院することになりました。

一日目、入院当日、病院についてかんごしさんのみなさんに、「よろしくおねがいします。」とあいさつをしました。するとかんごしのみなさんがえがおでむかえてくれました。安心して部屋ににもつをおいてかんごしさんが、病院の中をていねいに案ないしてくれました。とても分かりやすかったです。夜、お母さんたちが家に帰った後に、仕事帰りにお父さんも来てくれました。うれしかったです。みんなが帰った後、少し心ぼそくなってきて、かんごしさんたちがいる部屋にいったら、いっしょにおりがみをしてくれました。楽しかったです。その後は、おちついて眠れました。

二日目は手じゅつの日で朝から何も食べられませんでした。九時半から手じゅつが始まるので九時からてんてきをしました。さす時は少しいたかったけど、かんごしさんが、「だいじょうぶだよ、安心してね。」と言ってくれたのでできました。お父さんやお母さんもそばにずっといてくれました。手じゅつ室に入る時、ドアにかんごしさんがつくってくれた、「がんばってね！」という文字がはってありました。とてもびっくりしてすごくうれしかったです。ベッドにねてさんそマスクをつけて、ますいを入れました。それからはねているのでおぼえていませんでした。目がさめた時にはべつの部屋にいてかんごしさんやまわりの人たちに、「だいじょうぶ？」といわれたけどしゃべれませんでした。とてもきつかったです。

三日目は一番きつい時だったのでほとんどねていました。お母さんも夜までずっといてくれました。

四日目はだいぶ治ったけどまだいたかったです。夜、心ぼそくなって泣いてしまったけど、かんごしさんがちゃんとお世話をしてくれました。

五日目から七日目は、お友だちや家族がおみまいにきてくれてとてもうれしかったです。早くみんなと遊びたいなぁと思いました。

八日目、ついにたいいんする日が来ました。朝、家族がむかえに来てかんごしさんの話をきいてじゅんびをしました。最後にかんごしさんにお手紙をわたしました。するととても喜んでくれました。入院はとても大へんだったけど、とてもいい体験になりました。

小学生の部
優秀賞

古賀市・小学３年
廣田 琉花

「にゅういんして」

わたしは、じんこうこきゅうきをつけています。小さい時にいっぱいにゅういんをしました。

はいえん、むきはい、きかんせっかいのしゅじゅつ、いろうをつくるしゅじゅつのために、にゅういんしました。

そして、きょねんの二年生の秋、三十九どねつが出て、びょういんに行きました。B先生が、しゅっちょうでいなかったから、わたしはがっかりしました。B先生は、H病院の先生です。いつもわたしをみている先生です。かわりに、K先生という先生がみてくれました。いつもとちがうからちょっときんちょうしました。

まずは、インフルエンザのけんさをしました。はなのおくに長いぼうを入れた時、きつかったです。そのあと、ちをとるけんさをしました。痛かったけど目をつぶってがまんしました。

けんさがおわって、

「インフルエンザじゃない。かぜかなあ。」

とK先生が言いました。わたしは、

「よかったなあ。」

と思いました。

いろうからごはんを入れると、はきそうになったので、にゅういんして、てんてきをすることになりました。

びょうしつに行った時、かんごしさんがいっぱいいたのでびっくりしました。ひさしぶりにあうかんごしさんも、いっぱいいました。

「おおきくなったね。」

といわれました。うれしかったです。

にゅういんしたから、がっこうのゆうあいセールに行けなかったです。くやしかったです。おなじクラスのともだちが、どうがをおくってくれました。うれしかったです。ともだちがどんなものを買ったのか、どうがを見ました。わたしも、

「ありがとう。早く元気になって、学校に行くね。」

と、どうがをとっておくりました。わたしは、

「ともだちがよろこんでくれるかな。」

と思いました。わたしは、

「かんごしさんはやさしいけど、早く学校に行きたいから家にかえりたいなあ。」

と思いました。

五日間にゅういんして、元気になりました。

「やったぁ。元気になってよかったなあ。」

と思いました。かんごしさんと先生に、

「ありがとう」

と思いました。

表彰式の様子

（平成30年１月20日（土）　福岡市・イムズホール）

一般の部・最優秀賞
岡田 紀子 さん

一般の部・優秀賞
岩佐 奈津実 さん

一般の部・優秀賞
立花 悦子 さん

中高生の部・最優秀賞
井上 紗歩　さん

中高生の部・優秀賞
松尾 康生 さん

中高生の部・優秀賞
野中 愛仁 さん

小学生の部・最優秀賞
田中 花 さん

小学生の部・優秀賞
兼屋 瞳子 さん

小学生の部・優秀賞
廣田 琉花 さん

選考委員

福岡県教育委員会
小西　聡子

西日本新聞社編集局
田川　大介

筑紫女学園大学文学部日本語・
日本文学科教授
中村　萬里

福岡県医師会広報委員会委員長
塩谷　眞子

福岡県医師会副会長
堤　康博

福岡県医師会理事
中村　秀敏

福岡県医師会理事
馬郡　良英

福岡県医師会理事
佐藤　薫

募集要項

●医療従事者と患者さん、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集します。

●400字詰め原稿用紙３枚～５枚以内（1,200～2,000字）
鉛筆（Ｂ、２Ｂ）／ボールペン／万年筆／パソコン／ワープロのうち、いずれかを用いて、濃くはっきり書く。
※パソコン・ワープロの場合、１ページ400字（20字×20行）。

●表紙をつけて、部門、題名、〒住所、氏名（ふりがな）、年齢（生年月日）、性別、所属、電話番号、ＦＡＸ番号を明記して下さい。

●福岡県内の学校に在籍する児童生徒、および一般県民
※医師を除く

●自作の未発表作品に限り、盗作、二重投稿は固くお断りします。
※応募作品について盗作等による著作権侵害の争いが生じても、主催者は責任を負いません。

●応募作品は返却いたしません。

●入選作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。
※そのため主催者、後援者がインターネット上で開いているページや、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。

●【一 般 の 部】最優秀賞　１名
優 秀 賞　若干名
【中高生の部】最優秀賞　１名
優 秀 賞　若干名
【小学生の部】最優秀賞　１名
優 秀 賞　若干名
受賞者には賞状と副賞を授与いたします。

【問い合わせ】福岡県医師会総務課　作文コンクール係（TEL 092-431-4564）

主催：公益社団法人福岡県医師会
共催：福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社
後援：九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社（順不同）

平成30年２月発行
公益社団法人福岡県医師会
〒812-8551　福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30
電話：092-431-4564　ＦＡＸ：092-411-6858

FMA